

高美倫以下の諸智證大師畫贊の存在と合せて在列の贊した畫像があつたのではないかと云ふ疑問を起すには充分である。恐らく彫像と並んで餘程早くから畫像が行はれて居り、弘法大師像等の例から考へて、兩者共に像容の相似た一形式を作つてゐたことを推定し得られると思ふ。本像はかゝる畫像の一つの傳寫と考へていゝではあるまいか。唯本像は先述の如く既に原像の時代を去ることの大なるに伴ふ形式化の跡を蔽ふことができず、早くも鎌倉時代を溯り得ないと思はれるが、なほできるだけ古様を傳へて原本の倂を偲ばせ、何等の恣意を含まない謹恪さを以て終始してゐるのは、智證大師畫像の稀なる遺例であることと共にその價値を推すべき點であらう。(渡邊)

一、應舉筆 山水圖 香川縣 金刀比羅宮藏

壁貼付 紙本墨畫 高二米五八・二種 幅四米七七種

三、四 同筆 竹林七賢圖 同縣 同社藏

襖八枚 紙本墨畫 大襖四枚 各高一米八三種 幅一米三九種
中襖四枚 各高一米八二種 幅一米一五種
(以上渡邊「讚岐金刀比羅宮書院の應舉の襖繪」參照)

五、傳牧溪筆枯木雀圖 東京 根津嘉一郎氏藏

掛幅 紙本墨畫 豎 八四・七種 橫 三〇・九種

「ぬれ雀」として古來喧傳する名軸である。畫面の中央、ツとうねり出た淡墨の枯枝に、一番の雀が翼を並べた光景で、枝頭に皺む唯だ一葉の残ることが、うそ寒げなる初冬の空を思はせる。枝の根元に濃淡の墨色をかく竹の葉の群が添へてあり、羸惡にして古法なしといはれた牧溪一流の竹としても、これはまた餘りに用筆自由に過ぎると不思議がりて注視すれば、そのあたり一面に、極淡墨暈に加へて無數の濃墨の小飛沫——吹き墨——が施され、實にこそ雨の竹の列を亂したのであつたかと、始めて微笑せられる。二羽の雀は互に水も洩

らさじとヒタと寄り添うて居るものの、一羽は外隈の柔肌を枝に付けつゝ、眼を半眼に閉ぢて、眠るが如く眠らざるが如く、はた一羽のやをら頭を擡げて何

彈 阮 咸 婦 人 像

東 京 美 術 學 校 藏

やらん背のあたりを啄む傾げな風情にも、雨の日の佗しさは見る者の心に浸み入る。それよ、死灰か、あらず、心意の全く鎮さんとして、僅かに動ける様に此畫の禪的狙ひがあり、固より亦たそこに初冬の雨に朽たさるゝ自然の一角が面白く出て居る。

畫中筆者の款記あるなく、これを「和尚」の筆とすることは偏へに古人の鑑識による。しかも畫中「雜華室印」及び「善阿」の二印記あるを見れば、その東山以來の名物たるを知るべく、玩貨名物記「東山殿御物御掛繪」の條に、

一雀 傳牧溪

阿部備中殿

と記せるも、さこそと首肯せられる。(脇本)

六、彈阮咸婦人像

東京美術學校藏

白玉石造 總高二三種 臺座高六・五種

豐頰翠髮の一美人が軽く面を傾けて、自ら彈する嘈々切々の音に聴き入る所、切長な眼に、瞳を點ぜぬ虚ろな感じも、却つてその放心の状をよく表出し得てゐる。稍左に傾く姿態は甚だ美しく、右隅臺下に蹲踞する二頭の獸は左臂から垂下する領巾の流るゝ如き線を受けて、全體の均衡を整へ、安定の感を與へてゐる。胸を左衽に合せた寛濶な上衣の表現、袖、膝の邊りに疊む衣褶の柔い感じ等、すべて簡潔にして要を得、一見その技巧は稚拙な様であるが、その雕技は決して凡とすべからず、全體の構想は云ふも更なり、前髪を結んだ紐や、髪の後挿した櫛などまで要領よく刻み出し、さては右側の鬢の軽く頬にかゝり、左側の鬢の髪重さにふつくと膨む所など、細部に互つて繊細な注意が行き届いてゐる。重要な箇所には欠損が多く、土蝕の痕をも全面に止めてはゐるが、石の色は稍褐色を帯びた乳白色であつて、如何にも温く豊かに感ぜられる愛すべき小像である。たゞ此像にかなり色濃く遊戯的な、且頹廢的な氣分の漲つてゐることは、單にその主題によつて然るのみならず、その時代の然らしむる所といふべきであらう。

このやうな奏樂或は舞踊その他の姿態を表した婦人像は、既に漢代の土偶中に見え、隋唐に入つては益々多く、かくの如き姿態容貌の特に唐代に盛行した事は夙に濱田耕作氏の注意された所であり(唐代女俑の一樣式参照)、唐代土偶、西域發見繪畫、正倉院鳥毛立女屏風等と揆を一にするものであつて、本像の製作年代も亦唐代中末の比と考へて謬らないであらう。

此像は打見た所當代に盛行した婦女俑をそのまゝ石に寫したかと思はれるものでありながら、その意匠に於ては深く佛教彫刻の影響を享けてゐるものである。その半跏に似た膝の組形、方角の臺座四面に香狹間を刻む所、佛像の臺座正面兩脇に侍する狡貌の如き異獸が、形こそ崩れたれ、その一隅に蹲踞してゐる等、皆その佛像から奪胎したものである事を思はせる。佛像にあつては半跏の姿は甚深微妙の思惟に耽る崇高さを示すものであるが、此處では樂器を持つに恰好な怡樂の態に過ぎない。その上に嚴然と直立し、又は端然と倚座すべき臺座に、この美人はやゝ斜に、崩折れるやうに腰を掛けてゐる。像を侍護すべき靈獸すら一は嬉々として領巾に戯れ、一は耳をそばだて樂に聞き惚れる如く靜かに踞まつて、恰かも狗猫と化したかと怪しまれる。此時代にあつてかくの如き純粹の玩賞像を見る事が已に珍らしいのみならず、かくの如くその意匠を森嚴なる佛菩薩の造形様式に借りて、一變してその像にふさはしい和樂の姿に造りなした所に、この工人の勝れた手腕と、その如何にも樂みつゝ刻んだであらう境地を微笑ましく想像する事が出来やう。更に想像を逞うするならば此像の製作は穀壁等の雕琢を事として雕虫の細技を矜つた玉人の手に出づるものでもなく、將士偶製作に従事した傭工の手に係るものでもなくして、主に佛教彫刻に携つた手人の餘戯に成るものではあるまいか。

婦人の手にする樂器はその胸が圓形であり、且つ四絃である所から推して阮咸であらうと思はれる。阮咸はかの晋の阮咸の創る所とも傳へられるもので、琵琶に類する樂器である。支那に於ても此時代には行はれたのであらうが夙く泯びて今日には傳つてゐない。我國にもその樂器と奏法は傳つたらしく、現に正倉院には二面の阮咸を遺してゐるが、その奏法はすでに平安朝に忘れ去られ